

2024年度 岡山大学大学院法務研究科  
法学既修者入試B日程 試験問題

## 刑事法系（刑法、刑事訴訟法）

<解答上の注意>

1. この問題冊子は、表紙を含め3枚である。
2. 問題には、問題1（刑法）と問題2（刑事訴訟法）がある。配点は、問題1が60点、問題2が40点である。
3. 表裏に解答欄がある解答用紙は、2枚が配付されている。各問題ごとに解答用紙1枚を使って解答すること。
4. 解答用紙の受験番号欄に受験番号を算用数字で記入し、また試験科目欄に「刑事法系」と記入すること。なお、整理番号等その他の記入欄には記入しないこと。
5. 試験終了後、問題冊子及び下書用紙は持ち帰ること。
6. 解答の際は、黒又は青のボールペンを使用すること。
7. 六法は貸与品なので、折り曲げや書込みをしないこと。なお、書込み・汚損等がある場合は申し出ること。
8. 試験終了後、指示があるまで席を立たないこと。
9. その他は、すべて監督者の指示に従うこと。

### 【問題 1】

次の各〔設問〕に答えなさい。解答用紙の冒頭に「問題 1」と記入すること（解答順序は問わないが、設問番号を記入すること。また、2問とも解答すること。）。

#### 〔設問 1〕（配点 40 点）

Xは、強盗目的で殺意なくAの頭部を鉄パイプで殴打したところ、Aは脳挫傷の傷害を負うとともに、その場で気を失った。その直後、Xの友人のYが偶然その場に現れた。Xが強盗目的でAを殴打したことを聞かされたYは、自分も金品が欲しくなり、Xとともに、Aの財布を奪った。

なお、XとYがAの財布を奪った時点では、Aはまだ存命しており、XもYも、Aが死亡しているとは思っていなかった。また、Xの殴打行為は、通常人であれば死亡することはない程度のものではあったが、Aは脳の血管が細くなる脳血管障害を患っていたことから、脳血管が圧迫され、脳梗塞を生じ死亡した。Aが脳血管障害を患っていたことは、本人もAの家族や友人たちも知らなかった。

XとYの罪責を論じなさい（特別法違反の罪を除く）。

#### 〔設問 2〕（配点 20 点）

Zは、B女（以下、Bという。）との別れ話のもつれから、Bを殺害してBとの関係を終わらせようと決意し、某日、Bの首を絞めて窒息死させた。Zは、当初はBのハンドバッグを持ち去るつもりはなかったが、遊興費に窮していたことから、B所携のハンドバッグを換金して遊興費を得ようと思い、Bのハンドバッグを殺害直後に持ち去った。

Zの罪責を論じなさい（特別法違反の罪を除く）。

《問題 1 以上》

《次頁に続く》

## 【問題2】

次の【事例】を読んで、後記各〔設問〕に答えなさい。解答は、【問題1】を解答した用紙とは別の解答用紙に書き、冒頭に「問題2」と記入すること。

### 【事例】

- 1 12月下旬のある日、制服を着用した警察官Kらは、深夜、閑静な住宅街でのパトロール中に、大声を出しながらふらふらと歩いている者（後に「甲」と判明した。）を発見した。Kは、甲に対し、「どうしましたか。」と声をかけ、①職務質問を開始した。Kらの姿を見た甲は驚いた様子で「何でもない。散歩をしているだけだ。」と述べて不服そうな態度をとった。このとき、Kらは、甲から酒の匂いがしなかったことを確認した。Kが、さらに、「散歩ですか、ご自宅はこのあたりですか？身分証明書で確認させてください。」と申し向けると、甲は急に怒り出し、「嫌だ、嫌だ、拒否する。」などと言って抵抗した。Kが職務質問を続けつつ、甲の様子を観察すると、甲は、態度の変化が激しく、周囲が閑静な住宅街であるにもかかわらず大声を出しており、また、半袖シャツを着用しているにもかかわらず全く寒がる素振りがなかった。Kは、これらのことから、甲が何らかの違法薬物の影響下にあるのではないかと考えた。
- 2 職務質問の開始から15分ほど経った頃、甲は「もういいでしょ、帰る。」と言って、その場を立ち去ろうとした。Kは、「今のあなたはふらふらされていて、夜道を一人で歩くのは危険です。それに、まだあなたのお名前も聞いていませんし、身分証明書も見せてもらっていません。もう少しお話を聞く必要があります。」と声をかけたが、甲はそのままKらから離れて歩き出したので、Kは、甲を停止させるために「お話を聞かせてください。」と言いながら、②甲の左肩に手をかけた。

### 〔設問1〕（配点10点）

下線部①の職務質問は適法か、具体的事実を摘示しつつ論じなさい。

### 〔設問2〕（配点30点）

下線部①の職務質問が適法であるとした場合、下線部②の処分は適法か、具体的事実を摘示しつつ論じなさい。

《問題2 以上》

《刑事法系問題 以上》

**【出題趣旨】**

**【問題 1】 刑法**

設問 1 は、因果関係の有無及び承継的共同正犯が問題となる事案を素材として、刑法総論の体系的理解と事案処理能力を問うものである。

設問 2 は、いわゆる死者の占有及び奪取罪における不法領得の意思の意義が問題となる事案を素材として、刑法各論の基本的な理解と事案処理能力を問うものである。

**【問題 2】 刑事訴訟法**

本問は、行政警察活動としての職務質問及びその際の有形力の行使の適法性について、判例の立場をも踏まえながら論じ、具体的事案を解決することを求めるものである。